



清田区 研究実践園研究事業
研究だより

札幌市立認定こども園にじいろ
研究だより 第4号
令和5年9月29日(金)発行

認定こども園にじいろ・かっこう幼稚園 研究重点
心を動かし、思いをもって遊び込む幼児を育むための保育者の援助と環境構成

今回の研究だよりでは、5歳児と2歳児の実践事例を紹介します。

実践事例 5歳児(らいおん組) ~泡はどうやってつくるの?~

【遊びが始まるきっかけ】

水遊びの準備もまだ始まっていない7月のある日。クラス全体に向けて保育者が水遊びの話をする時、子どもたちから「そういえば泡をつかって遊んでいたよね!」と昨年度の年長組の様子を思い出し話す姿がありました。その後、「泡ってどうやってつくるのかな?」「石鹸かも?」と子どもたちの中で疑問が生まれたことで、泡づくりが始まっていきました。



保育者の思い

困ったときや疑問を感じたときに、自分で考えるよりも先に他人に助けを求めがちな子どもが多く、どうすればいいのか自分たちで考えていく力を伸ばしたいという保育者の願いがあります。

泡づくりに挑戦!!!

“子どもたちの「やってみよう」を支えるために”

子どもたちの「ふわふわの泡をつくりたい」という思いを汲み取り、水遊びの設定の中ですり鉢やすりこぎ、ボウルやおろし器と石鹸など使用する道具や素材を用意しました。

様々な道具や素材を使う中で、子どもたちなりに試行錯誤しながら泡づくりを楽しみ、疑問や興味をもったことを友達と声に出し合いながら、試していく経験を積み重ねていきました。数名で始まった実験が次第に友達の目にも止まり、沢山の子が泡づくりを楽しむことにつながっていきました。



遊びの中で
こんな会話がありました



泡ってどうやってつくるのかな?
石鹸と水を混ぜてみよう!

泡になったけど
すぐに消えちゃう...



水が多いのかな...?
石鹸を多くしてみよう!

疑問が次々と生まれていきましたが、保育者に助けを求めつつも、「こうやったらどうなるかな?」など前向きに考える子どもたち。昨年度は石鹸をレンジで温めていたことを聞きつけ、やってみることに...「ふわふわになった」と喜ぶ子や「ふわふわじゃない!水が多いのかな?」と考える姿がありました。ふわふわの泡ができた子たちはできたことに自信や満足感を感じているようでした。



次は片栗粉・小麦粉を混ぜてみよう！

片栗粉・小麦粉は泡にならなかった…



チンした石鹸（レンジで温めたもの）で
もっと泡づくりをしたい！



室内で片栗粉や小麦粉で遊んでいたこともあり、子どもたちから「片栗粉・小麦粉でも泡がつくれるかもしれない！」という一言から挑戦してみることにしました。できたものとイメージしていたものは違ったようですが、挑戦できたことに喜びを感じ、試していく中で、子どもたちからの発信も増えていきました。



話し合いから

◎先行体験（遊びの伝承や憧れ）

昨年度の年長児に対しての憧れを感じていたことから、泡づくりに限らずいろいろな遊びが伝承していき、子どもたちのやってみたい気持ちへとつながっていったのではないかな。

◎“失敗する経験”

挑戦する中で失敗することがあっても失敗することで、更なる疑問につながり、「やってみよう！」「こうやったらどうなるのかな？」など自分の考えや挑戦心が生まれる。年長児ならではの追及心、深めたい気持ち、自分で考えることの保障が大切だと思う。

◎融通性

遊びの中で、保育者の予想していた姿とは別の姿が現れることもある。そのため、子どもの思いを受け止めて遊びを展開できるように支えていく。

実践事例 2歳児(こあら組)



ねらいを定めて水鉄砲発射！



どろどろ
面白いね！



こあら組は、2歳児クラスになり、朝や夕方の時間に3～5歳児クラスの友達と一緒に過ごす時間が多くなりました。水遊びを始めたばかりのころは、園庭の角の方で『タライの水に手を触れる』『泥水に足をそっとつけてみる』といった感触遊びが多かったです。

しかし、3～5歳児クラスの水鉄砲やバケツで水をかけあう姿や泥水にも躊躇なく入っていく姿など楽しそうに遊ぶ様子を見て、年長児に水鉄砲の使い方を教えてもらい、友達同士かけあってみたり、泥水の上でジャンプをしてみたりと少しずつダイナミックな遊び方に変わり、遊びの幅も広がっていきました。

異年齢での関わりを大切に、たくさんの刺激を受けながら、様々なものへの興味を広げていけるよう関わっていきたくと考えています。



清田区 研究実践園研究事業
研究だより

札幌市立認定こども園にじいろ
研究だより 第3号
令和5年8月31日(木)発行

認定こども園にじいろ・かっこう幼稚園 研究重点
心を動かし、思いをもって遊び込む幼児を育むための保育者の援助と環境構成

今回の研究だよりでは、4歳児と1歳児の実践事例を紹介します。

実践事例 4歳児(きりん組) ～自信を持って取り組んでほしい(運動遊び)～

【遊びが始まるきっかけ】

運動会が近づいたある日の夕方。保育者が跳び箱の絵を描いていると「これなに？」と興味をもつ保育園児。「もうすぐ運動会あるよね。」など会話を楽しんでいると「鉄棒やりたい！」と昨年たくさん取り組み、できるようになった鉄棒を思い出した様子。その後、会話が弾み、いろいろな運動遊びが描かれた絵が完成しました。

次の日の朝、幼稚園児も登園してくると貼ってあるその絵を見つけました。保育者や保育園児から運動会があることを教えてもらい、きりん組みんなの共通のやってみたいことになっていきました。



保育者の思い

興味の幅は広いですが、「できない」とあきらめる姿も多いクラス。特に、運動遊びは「やったことがないから、できなさそう」と苦手意識をもちやすい印象があります。運動会をきっかけとして、様々な運動遊びに挑戦し、好き、得意、できるを増やして欲しいなと思い、子どもたちと会話をしていました。絵に描いておくことで、視覚で分かりやすく、共通意識をクラスでもつことができたのではないかと思います。

お互いを認め合うよさ

またやってみたいが生まれる環境

取り組み表(うんどうかいがんばるかーど)を用いることで、様々な種目をやってみようとする姿がみられました。誰かができると「すごいね！」と子ども同士で認め合い、嬉しい気持ちや誇らしい気持ちを感じられたと思います。「またやってみたいな」と思う環境の中で伸び伸びできたことが、運動会の活動にも生かされました。

遊んでいるときに子ども同士でこんな会話をしていました♡



ばんだ(年少)のときは縄跳びでできなかったけどきりん(年中)になったからできるようになった！

そうだよね！きりんさんだからできるよね！

以前の自分と比較してできることが増えていると実感し、自信をもっていることが伺えます。



選択できることで「全部はできなくても、どこかならできるかも」とやってみようとする気持ちが生まれたように思います。



何に挑戦しようか？など見通しをもちやすく、「やりたい」と子どもたちからの発信が増えました。



話し合いから

・年少から年中になってできることが増えた子どもの気付き

→自分自身でできるようになったことに気付き、自信をもって取り組むことにつながった。

・取り組み表＝目で見てわかる達成感

→「全部はできなくても、どれかならできるかも」「取り組み表に○を増やしたい」などそれぞれの思いは違ってもクラスとしての着地点は同じになり、共通の目標をもつことができた。

・粘り強く取り組む力

→今回は様々な運動遊びに取り組む事例であったが、“ちょっとできた”で終わらせず、目標を決めて継続的に取り組めることも大切。上達することで、さらに大きな達成感と自信をもつことができるのではないかな。

運動会をきっかけにいろいろな運動遊びを楽しんでいます。運動会をゴールとせず、「やってみよう」「おもしろい」「もっと上手になりたい」など子どもたちの興味を大切にしたい保育を今後も行っていきます。話し合いをもとに最近では次のような取り組みもしています。

いろはにこんぺいとう

縄の上・真ん中・下をくぐり抜ける遊びです。縄に触れないように体の使い方を考えながら取り組んでいます。



【スモールステップで取り組む】

ヘビ跳び、大波小波、縄くぐりなど子どもたちの発達段階に合わせ、スモールステップで取り組んでいます。また、縄回しなど縄跳びと類似した運動遊びも取り入れ、様々な運動感覚を体験し、体を動かすことが楽しいと感じて欲しいと考えています。

【年長児への憧れ】

運動会が終わった後も自由遊びで大縄跳びなどの運動遊びに挑戦しています。らいおん組（年長児）がたくさん跳べることに気付き、「すごい」と憧れも感じているようです。

縄となかよしになろう！

縄を使って一本橋のコースを作り、落ちないように渡っています。縄跳びに苦手意識のある子も楽しく遊んでいます。



実践事例 1歳児(うさぎ組) なんだこれ～！がいっぱいの感触遊び

ツルツルで冷たい！
なかなか掴めない
なあ…



ブルブル
してる～♪



ネチョッとすけるけど、それが楽しい！



好奇心旺盛なうさぎ組の子どもたち。暑い日が続いていたこともあり、大好きな水遊びを思う存分楽しむことができました。そんな水遊びの延長で、感触遊びを取り入れ、氷、寒天、指絵の具など、様々な素材の感触を味わっています。初めて見る素材に、“なにこれ…”と一歩引いて見ていた子ども、保育者や友達が楽しそうに遊んでいるのを見ると、“ちょっと触ってみようかな？”と近付いてきます。触ってみると、“怖くなかった！”“もっとやりたい！”の気持ちも生まれました。安心できる保育者と友達の中で、様々な“やってみよう”を引き出し、幼児期へと繋がる成功体験を重ねていきたいと考えています。



清田区 研究実践園研究事業
研究だより

札幌市立認定こども園にじいろ

研究だより 第2号

令和5年8月8日(火)発行

認定こども園にじいろ・かっこう幼稚園 研究重点
心を動かし、思いをもって遊び込む幼児を育むための保育者の援助と環境構成

今回の研究だよりでは、3歳児と0歳児の実践事例を紹介します。

実践事例 3歳児(ぱんだ組) ~誕生会から繋がった「色水遊び」~

【色水遊びが始まるまでのクラスの实態】

約半数が新入園児という構成でスタートした年少組の4月。一人一人の好きな遊びや経験、発達段階が異なる中で、昨年度の研究考察から、まずは安心感をもてるように配慮しました。遊び慣れた玩具をいつでも使えるようにしておく他、一日の流れを一定に見通しをもちやすいようにしました。また、同年齢保育をベースとし、「いつもいる先生や友達」が分かるようにしました。徐々に新しい環境に慣れ、喜んで登園し、新しい遊びにも挑戦する姿が見られ始めました。(子どもたちの姿を捉え、現在は異年齢保育も取り入れています。)



遊びの「種」

子どもたちの遊びの興味は様々ですが、4月の誕生会で子どもたちに共通した「やってみてみたい」の種が見つかりました。保育者が行ったジュース屋さん(色水マジック)の出し物がきっかけです。「やってみてーい！」と言う子、言葉には出さずともそっと触れに行き興味を示す子、行動には出さずとも目をキラキラさせている子など、反応は様々でしたが、保育者は一人一人の想いや興味をキャッチするよう努めました。

色水っておもしろい！！

「色水」 = 夏に戸外で行う遊び!?

子どもたちの「やってみてみたい気持ち」を汲み取り、使用する教材や環境を見直すことで、室内でも色水を作って遊べるようにしました。

作った色水が室内にあることで身近なものになり、子どもたち自身がままごとやブロックなどの日常の遊びとつなげて遊び始める姿が見られました。



ジュースにしたり、シロップ薬にしたり、「海」に見立てたり。

※想像を膨らませながら、遊び姿がありました。



せんせいみたいに、じぶんでできた～！

自分で使う分の水を量り、赤・青・黄色の3原色から好きな色を選んで、ジップロックの中に入れて揉み揉み！振り振り！

※自分で最初から最後まで作ったことで、「できた！」の満足感を感じられていました。



お友達と色や濃さが違う。どうしてかな。聞いてみようかな。



※色の混ざりを発見したり、想像したり、保育者や友達に「伝えたい」という気持ちが芽生えました。



話し合いから

- ・子ども自身が「やってみたい」と心を動かし、実際に「できる」ことで充足感を感じられる。「もっとやりたい」「またやりたい」と遊び込む幼児を育む土台になるこのような経験をたくさん保障したい。
- ・遊びを継続するためには、既定の遊び方に捕われず環境構成を工夫したり、発達に合わせた援助をしたりすることが大切である。
- ・「作って終わり」ではなく、遊び続けられる安心感があったのではないか。また、遊び続けることで、自分で遊びを工夫し、より楽しむ姿がある。子どもたちの様子を見取り、さらに遊びが深まるための配慮が必要となっていく。
- ・作ったものを見てもらったり、友達が作ったものを見たりすることが刺激となり、その後のやり取りに繋がり、遊びが豊かになっていく。保護者や他クラスの子どもの目にも触れられるようにすると、一層の刺激になるかもしれない。

話し合いの後も、子どもたちの発達段階に合わせることを前提としながら、すべての遊びを保育者が決めてリードしてしまうのではなく、子どもたち自身の「やってみたい」の気持ちを受け止めて活動に取り入れています。幼児期のすべての学びにつながる遊びを、今後も大切に支えていきます。



【自然物での色水も面白い！】

散歩先で見つけた「不思議な実」で色水ができるかも！？と子どもたち。予定外の活動でしたが、帰ってすぐに試してみました。数日前に保育者が遊びの中で伝えた「タンポポでの色水作り」から連想したのでしょうか。



【さまざまな感覚で楽しむ色水遊び】

ドロっとした色水絵の具でハンドペイントをしたり、寒天で固めたツルツルの色水に触れてみたり。一人一人が楽しめる色水遊びを子どもたちとの対話の中から探っています。



実践事例 0歳児(らっこ組) マットで遊ぶのって楽しい！

先生と一緒に
安心する！



先生と一緒にだと
楽しいな♪

四つ這いやつかまり立ちで体を活発に動かすことが多くなってきました。子どもの、“探索したい”や“動きたい”気持ちを受け止めながら安全に楽しく体を動かせるようウレタンマットを取り入れています。保育者が声をかけながら一緒に登ったり楽しんでいる姿を見せたりすることで、安心感のある中で“楽しいな”の気持ちを育てています。